＜中学校＞

2 時限目　運用対象の選び方

マーケットは万人のもので、投資家はそのマーケットに参加します。すなわち個々の投資家が自分の財布とも相談しなければなりません。つまり今自分が参加しようとしている局面が、自分の運用枠や運用ルールに合致したマーケットなのか判断しなくてはいけません。

マーケットの波動には様々なパターンがあり、とらなければいけないリスクの幅や狙えるリターンの幅などが変わってきます。「マーケット分析」によって見出された全ての波動を狙いにいっては、「利益幅」と「損失幅」のバランスを保てなくなり、気が付くと予想以上のリスクをとることになってしまいます。あくまで個々の投資家個人がとれるリスクのマーケットにのみ参加するということが大切です。

では A という投資家を実例に沿って説明していくことにいたしましょう。

投資家 A さんの売買基本スタンス（ルール）＝「A さんのお財布」

＊　リターンは常に 70 銭以上見込めるマーケットに参入。

＊　損失（リスク）はコスト込みで 40 銭以内に抑えたい。

＊　理想のリスクとリターンのバランスを「2 対 3」以上と考えている。

以下 2 つのマーケット局面では、A さんは下降フラッグ（青線）が継続されると判断し、「売り」からマーケットに参入しようと考えています。このシナリオからリスクテイクの限度にマーケットがタッチした時点でロスカット（損切り）をします。またターゲットゾーン近辺でプロフィットテイク（利食い）を行います。

株式会社フィナンシャルヴィレッジ

（局面①）

現在値はそのフラッグの中の上方に位置し格好の売り場（121.00 円）となっています。ここで抱えるべきリスクは、赤い部分の値幅となります。それ以上のリスクは負ってはいけません。121.20 円のストップオーダー（逆指値）買いで対処します。

一方、リターンは 120 円割れ近辺におくことができます。119.90 円のリミットオーダー（指値）買いで対処します。この 2 つのオーダーを OCO（オーシーオー）オーダーで対応してもかまいません。

このストラテジー（戦略）は、現在値 121.00 円から 121.20 円の値幅 20 銭をリスクテイクして、121.00 円から 119.90 円の 1 円 10 銭をリターンとするものとなります。リスクとリターンのバランスは 0.20 円対 1.20 円（1 対 5.5）となります。

□	マーケット		Aさんのスタンス	
	リスク	リターン	リスク	リターン
マーケット価格	0.30円	1.10円	0.40円以下	0.70円以上
比率	1:3.667		1:1.5	

客観的に見ても悪いストラテジーではなさそうですが、A さんのスタンスと照らし合わせてみましょう。A さんの取れるリスクは 0.40 円以下でこのストラテジーのリスクが 0.20 円となりますからリスク面はクリアされ、リターン面でも 1.10 円見込めるため 0.70 円以上という A さんのスタンスにあてはまります。

したがってこの局面は、A さんのスタンスにあったマーケットと判断ができますから、行動を起こしてもよい、つまり売りにでてもよいということになります。

（局面②）

この局面では、現在値 120.75 円から 121.20 円の値幅 45 銭をリスクテイクして、120.75 円から 119.90 円の 85 銭をリターンとし、リスクとリターンのバランスは 0.45 円対 0.85 円（1 対 1.889）となります。

□	マーケット		Aさんのスタンス	
	リスク	リターン	リスク	リターン
マーケット価格	0.55円	0.75円	0.40円以下	0.70円以上
比率	1:1.364		1:1.5	

この局面をAさんのスタンスと照らし合わせると、リターンの部分では条件を満たしていますが、リスクの部分では0.40円以下というAさんのスタンスに対して0.45円と0.05円オーバーしています。

したがって現在値の120.75円では売ってはいけないということになります。条件を満たす値位置に指値をおくという対処がよいでしょう。

このように

① 売買の方針を決め

② マーケットのポイントからリスク及びターゲットを設定し

③ その最大リスク及びターゲットが自分の売買スタンスやルールに合致しているか判断

④ 売買を行動に移す

という手順を踏むことにより、不必要なリスクをとってしまったり、少ないリターンしか望めないのにもかかわらず、単に安そうだから売り、高そうだから買うという行動を回避していきます。

ここで出てきました自身の売買スタンスや売買のルールをどのようにして設定していくかについては後述しますが、マーケットのポイントいわゆるどの時点で最大リスクを見極めるか？またリターンはどれくらい見込めそうなのかを判断したらよいのかは次の授業でお教えします。

株式会社フィナンシャルヴィレッジ